

ART ESSAY

アート★エッセイ

住民参加の 「北御牧村写真プロジェクト」



佐藤 時啓
(写真家)

長野県北佐久郡北御牧村は、蓼科山を背に浅間山を正面に望む台地からなっている。2004年東部町と合併して東御市となったが、失われる村名を記憶に留めようと、2004年初頭に「北御牧村写真プロジェクト」が行われ、筆者もプロジェクトに参加し村民と一緒に制作を行った。

新年早々の日曜日、村民たちは村を流れるなじみの深い鹿曲川に続々と集まってきた。川の中洲に8×10インチの大型カメラを設置し、レンズには長時間露光の為の減光フィルターを取り付けている。これから何が始まるのか。以前に行った説明会で事例を示しているが、村民たちは期待と疑問を相半ばに待っている。

鏡を使った作品を皆で共同制作するのだが、いつものように私1人で制作するのではなく、風景の中に入り込み軌跡を残すのは、あくまでも北御牧の村民たちなのだ。皆それぞれに手鏡を持ち、カメラによって切り取られる風景の中で鏡に陽光を受け、自

らの存在を示すようにカメラに向かって反射させる。

私が制作する時は、移動し反射させる場所の位置関係を考え、それが写真に写るときに二次化される事による遠近の圧縮という変化を、常にイメージしながら動いている。だが、参加者たちにはそれを想像することは難しい。したがって1か所にかたまり過ぎたり、誰も居ない場所があったりと、私自身が1人で動くのとはまた異なった作品となる。とは言え、作品の意外性、完成後の感動や喜びの量でこのワークショップのような形式に勝るものは無い。完成した作品の中では、皆で反射させた多量の光がととも力強く輝いている。

今回のような住民参加型のプロジェクトというスタイルは、最近頻繁に耳にするようになった。表現する手段として、近代における個人の自我の確立と解放という過程を経て、現代では個人の表現に留まるのではなく、多くの他者と関わりながら美術を思考する必然性が出てきた。特種な芸術家個人にはなく公共の中にこそ可能性が潜んでいるのではないか。そのコミュニケーションとしての美術のあり方や可能性が今、さまざまな場所で問われ、また試されている。

(さとう ときひろ)



北御牧村(長野県)での住民との共同制作の様子(2004)

特集

先生が変わる! 授業が変わる!

第 3 回

パワフルアート宣言!

生徒のパワーに答える

学校を懐かしんで、卒業生が訪ねて来た。「先生、まだ廊下で授業しているの?」「中庭の作品はどうなっているの?」教室での活動はあまり記憶にないらしい。私にとっては、教室も廊下も中庭も同じ活動空間、と意識していたのだが、生徒たちにとっては、教室よりも強制された感じが少なく、伸び伸びと活動ができたのだろう。また、生徒のパワーあふれる想いが私に教室以外の場所を選ばせたのだろう。

ある日、日も暮れかけた美術教室の窓から、畑仕事をしている生徒の姿が見えた。鍬を振り上げ、必死に土を掘り返している。畑は数十分できれいに耕された。額には汗が光り、生徒たちは満足そうに作業の跡を見つめていた。そばに指導の先生がいないところを見ると、強制的に仕事を押しつけられた訳ではないことがはっきりと分かった。ふと畑の奥に目をやると植木鉢があり、その中には授業で植えたトマトの苗があった。その苗は水をやる者もないのか、うなだれている。植木鉢には、指導者によって指示されたとおり土や肥料がしっかり詰まっているはずなのに。私は、生徒の姿と鉢植えのトマトとを眺めながら、授業とは何か、学習とは何か、と考えさせられた。

授業では、生徒に強制する部分があることは、私自身理解していたつもりである。しかし、それは生徒のエネルギーや欲求を満たしていたのだろうか。鉢植えのトマトのように、制限された空間の中で、栄養素だけ与えておけば感動する力、表現する力が育つと思っていなかっただろうか。

この機会に、あらためて生徒の造形活動のパワーを考え直してみる必要がある。生徒と向き合い、美術の熱くエネルギーギッシュな部分を伝えていく必要性を感じる。授業の時間数や、教室の制限された空間をも乗り越え、常に外へと広がり続けていこうとする生徒のパワーを信じ、それを導いていく活動を続けていきたいものである。

倉敷っ子美術展

～わくわくドキドキ感動いっぱい夢いっぱい～

岡山県倉敷市立粒江小学校 岡根 誠

1. はじめに

岡山県倉敷市には、市内の小・中学生の造形作品が一堂に展示される美術展がある。この美術展は「倉敷っ子美術展」と呼ばれ、19年間も続いており、倉敷の地域に根ざした代表的な行事として定着している。私は倉敷市小学校教育研究会図画工作部の役員としてこの美術展の運営に携わっているが、その経験を生かして、倉敷っ子美術展の紹介をしたいと思う。

2. 取り組みの成果

倉敷っ子美術展の取り組みについての成果を以下のように挙げながら紹介していく。

(1) 鑑賞活動をする場の提供

今年の倉敷っ子美術展では、15日間の会期中に9995人の方が入場し、そのうち団体鑑賞は保育園2園、幼稚園8園、小学校30校、計3530人の子どもたちが訪れ、校外学習として鑑賞活動をしている。ある学校では、友達の作品を鑑賞することができる倉敷っ子美術展を開催している市立美術館と、その近くにある、世界的に有名な画家や彫刻家の作品を鑑賞することができる大原美術館(エル・グレコやゴッダンの展示作品で有名)の両



団体で鑑賞している姿

方を訪れるというような地域の特色を生かした鑑賞活動を展開している。

また、多くの一般市民も鑑賞することで、学校での図画工作科や美術科で実践していることを紹介できる場になっている。

(2) 美術館に展示される気持ちよさ

本校では、毎年3年生全員の作品を出品する。図工の好きな子や嫌いな子、得意な子や苦手な子、コンクールにいつも入賞する子や出品しても展示されないことのない子などどんな子どもでも、美術館で作品が展示される。そこでは、教室や廊下の掲示板とは比較にならない、普段は有名な芸術作品が展示されている大きな美術館に自分の作品が展示される気持ちよさを味わうことができる。



大きな空間に展示

(3) 造形表現の発達段階が一目瞭然

今年の出品点数は、小学校(平面2713点、立体3103点、共同制作23点の計5839点)・中学校(平面2133点、立体943点、共同制作8点の計3084点)合わせて総計8923点だった。その点数の小学校1年から中学校3年までの平面や立体の作品が一堂に展示されるので、造形表現の発達段階が一目でよくわかり、系統的な指導に役立てることができる。また、子どもたちにとっても、「中学生のお兄さん

やお姉さんの作品はすごいな」とか「〇年生になったらあんなのができるんだ」というような感想を持つことができ、関心・意欲が高まる。



中学生の作品を鑑賞している小学生

(4) 多様な展示方法の工夫

参加申込書に、展示形式の希望(展示パネル、展示台またはパネルと展示台)と、使用スペースの希望(壁面か床面)と、展示内容(展示テーマ、参加学年、展示想定図)を記入してもらう。会場構成を担当した私の所に送られてきたものは、実に多種多様で各学校の特色あふれるものであった。

例えば「ほくらの水族館」のテーマで巨大モビールを展示した学校は、出入り口に近くやや空気の流れがあるロビーで、自然に動くように展示の方法を工夫していた。



魚が動いて見える展示

また、壁面パネルに版画、展示台にエッグアートを展示した学校は、平面と立体をミックスして展示の方法を工夫していた。

他にも、作品を吊るしたり(写真1)、電源を使って作品の中を光らせたり(写真2)、森をイメージした背景をつくったり(写真3)するなど、子ど



限られたスペースを有効に利用した展示



(写真1)



(写真2)



(写真3)

もたちの表現の思いが伝わるような展示の方法が工夫されていた。

毎年、各学校が工夫した展示を実践することによって、他の学校が参考にしたり、より工夫したものにチャレンジしたりするようになった。

以上のような成果を参考にしながら、この倉敷っ子美術展を実際に鑑賞してほしい。

3. 第20回展にむけて

今回は、区切りの第20回展である。そこで、市内の図画工作部の先生方が講師となって会場で記念ワークショップを計画している。

日時：平成18年2月3日(金)～2月19日(日)

子どもたちのパワフルアートで埋め尽くされる倉敷っ子美術展が開催される倉敷市立美術館に、ぜひ足をお運びください。

(おかね まこと)

「絵を描いて右脳を鍛えよう」

青森県弘前市立第一中学校 東海 孝尚

1. はじめに

現在私の担当している1年生の多くが自分の描く力に不満を持ち、その理由は不器用だからというものがほとんどだった。小学校から中学校にかけてのこの時期、本物そっくりに描きたいという欲求が高まり、自分が描いた絵とのギャップから美術嫌いになる生徒も多い。美術の基礎基本はスケッチなど描く力とされているが、本当の基礎基本は対象を見る力である。見る力を鍛え、描写力の向上を狙った実践を紹介したい。

2. 脳の右側で描く

数年前、右脳による描画法のワークショップで様々な描画訓練を通して、描くことが苦手な参加者全員が確実に進歩するのを目のあたりにした。この描画法はカリフォルニア州立大学のベティ・エドワーズ女史が提唱する描画理論である。脳の認識を右脳モードへ切り替える方法を学ぶことにより、誰でも絵を描く能力が向上するというものである。「描く」技能は車の運転、スキー、歩行などと同様、全体として一つの技能に統合されるいくつかの技能によって構成され、それらをいったん習得し、統合できれば後は描けるようになるというのである。「描く技能」は五つの基本技能で構成され、その要素となる技能は次の「右脳による知覚する技能」である。

- (1) 端部の知覚(縁の感覚) = 輪郭線
- (2) スペースの知覚(空間の感覚) = 背景
- (3) 相互関係の知覚
(角度とプロポーションの比例感覚)
- (4) 明部と暗部の知覚(光と陰の感覚)
- (5) 全体を知覚しようとする感覚
(ゲシュタルトの感覚)

この右脳による知覚を妨げているのが、左脳の

知覚である。例えば椅子を描く場合、まず、眼から物体の情報が入り、左脳がこれまで蓄積したデータベースに照らし合わせ、椅子だと判断する。そこでは「これは座るためにつくられた椅子と名付けられた物で、既にどんなものか十分知っている」という決定がなされ、だから左脳はそれ以上観察したり情報を得ようとはしない。必要最小限の情報を得れば十分なのである。この描画法では左脳の知覚を抑え、右脳による知覚へ切り替えるための方法が確立されていた。

3. 授業での実践例

(1) コントゥール(輪郭)ドローイングの導入

この作業は、毎回授業の始め5分程度実施していて、手や丸めた紙、松ぼっくりなどできるだけ複雑な物を描かせるようにしている。例えば手を描く場合、生徒は手のポーズを決め描き始める。この時、決して描いている絵の方を見てはならない。そして、毎秒1ミリ程の速さで、手の輪郭、細かなしわの1本までを眼で追い、同じ速さで、目の動きに合わせて鉛筆を動かす。普段作業に集中できない生徒もこの時は一言も話さず描く。この訓練のねらいは、細部までじっくり観察させ、普段では考えられない量の情報を眼から脳に伝えることにより、無駄を嫌う左脳モードを抑えることにある。



授業中の風景



生徒の描写例

(2) 上下逆さまで描く

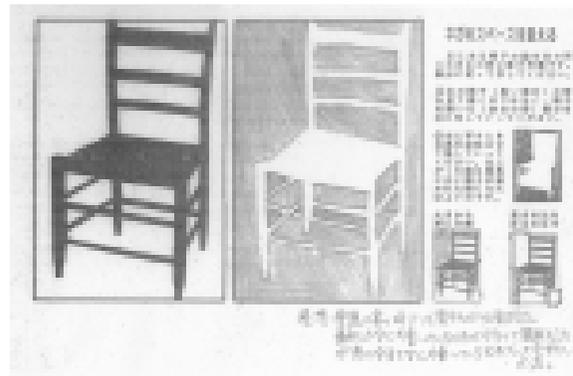
人物を逆さまに模写させた課題である。生徒は最初戸惑うが、見慣れると意味の無い曲線や形を写す作業が案外描きやすいことに気が始める。



逆さまで描いた作品例

(3) ネガのスペースを描く

椅子以外の形(ネガのスペース)に注目させ右脳モードに切り替える方法である。意味を持たない余白の形は左脳をギブアップさせる。



ネガのスペースを見て椅子を描く

4. 右脳の活性化は発想力も伸ばす

9か月間コントロールドローイングを実施してきた1年生の作品である。果物や野菜をモチーフにすることが条件だったが、アイデアスケッチの段階から奇抜な発想の作品が多数見られた。右脳が活性化すると発想力も向上すると言われている。



今回の実践での生徒作品

5. おわりに

この描画法は決して本物そっくりに描くことが最終目的ではない。右脳を活性化させ、より豊かな発想をもとに創造的に人生を生きていくためのものである。右脳による柔軟な思考とアイデアで、生徒が生き生きと学ぶことのできる授業をつくり出していきたい。(とうかい たかなお)

創造の翼を広げて ～造形おかざきっ子展の歩み～

愛知県岡崎市立甲山中学校 太田 幹雄
(造形おかざきっ子展事務局)

1. 造形おかざきっ子展誕生

昭和39年11月22日(日)、「第1回造形おかざきっ子展」が産声をあげた。昭和39年と言えば東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開通した年である。開催日当日は好天に恵まれ、市内外から多くの参観者が訪れたことが記録に残っている。しかし、造形おかざきっ子展(以下子展)の開催までには多くの諸先輩先生方の涙ぐましい努力と試行錯誤・美術教育に対する情熱があった。

子どもたちの創り出す造形作品は、子どもたち自身の夢や願いであり、生命そのものである。1時間1時間の図工・美術の授業で生まれた作品を校内の展示だけで終わらせたくない。野外展示が可能なものを一箇所に集めて展示し、子どもたちに自信を持たせ創造の芽を伸ばしたい。こうした教師の願いがこの野外展を生み出したのである。

子展が企画された当時は、このような大規模な造形展を開催している地域も少なく、また、企画段階においても予算面や展示方法など多くの課題を抱えていた。

現在のような予算措置もなく、図工・美術に携わっている教師たちが、自前で色紙や絵皿を描き販売し、展示等に必要物品を購入して運営したというエピソードも残されている。

その後、この教師たちの熱意が市当局や教育委員会に認められ、昭和39年に市内菟田公園で第1回展が開催されたのである。以後回を重ねるごとに作品の質も充実し、出品点数も増えた。子展

の成長とともに参観者も増加し、岡崎市民の秋の大きな文化行事として、親しまれるようになったのである。

2. 造形おかざきっ子展の運営方法

- (1)主 催
岡崎市現職教育委員会図工・美術部
- (2)目 的
 - ①市内の公立幼・小・中学校、全児童・生徒の作品を展示・発表する場をつくり、造形表現の喜びを味わわせるとともに、今後の表現力伸長の一助とする。
 - ②テーマをもとに、学校単位で現内容・素材・技法等の研究を重ね、その成果を発表する場とする。
 - ③1時間1時間の授業の中で生まれた作品のうち、野外展示にふさわしいものを選び、展示方法を工夫して発表する。
 - ④造形教育の意義を広く社会に伝え、作品を通して心の触れ合いを深める場とする。
 - ⑤過去の成果に学びつつ、今後の造形展の在り方を追求し、あわせて図工・美術教育の推進を図る機会とする。
- (3)期 日 10月の第四土曜日・日曜日
- (4)会 場
おかざき世界子ども美術博物館の館外一帯
- (5)研究テーマ
素材・指導方法・展示方法など、教師の研修を目的に、研究テーマを決め、学年ごとに取り組む。
- (6)内 容
 - ①作 品
 - ・研究作品
小・中学校ともに1つの学年を対象にテーマを決め、素材や表現方法等を研究して作品づくりをする。

- ・自由作品
エリア単位でテーマを設定し、自然を生かした野外展にふさわしい作品づくりをする。
- ②造形コーナー
・木切れ、自然物(木の葉、木の実等)を材料として、つくって楽しむコーナーや工作紙を使って遊ぶコーナーを無料で設置する。
- (7)企画・運営

- ①岡崎市現職教育委員会図工・美術部は下記の組織をもって企画・運営にあっている。
 - [総務部]
展覧会全般にわたる企画・運営について、原案作成と提案、運営にあたる。
 - [会場部]
会場構成、搬出入の企画・運営、諸材料・機材道具の調達にあたる。
 - [作品部]
テーマ、課題・自由作品の原案作成と提案、作品の管理にあたる。
 - [造形部]
造形コーナーの企画・運営にあたる。
 - [広報部]
広報活動の企画・運営にあたる。

3. 造形おかざきっ子展の今

図工・美術の授業時間数が削減された当初、学年を指定して開催してはという一部の声や、子展の開催自体を危ぶむ声も聞かれた。しかし、岡崎の子どもたちすべての作品を会場に平等に展示するという子展創立時の理念は躊躇なく踏襲された。授業時間削減で最も苦勞したのは、中学校の美術教師たちである。限られた時間で少しでも質の高い作品を、子どもたちの意欲を引き出す題材を、と試行錯誤がくり返された。毎年9月に開催される教育研究集会では、このような悩みや創意工夫を発表し合い、より質の高い授業を目指してきた。小学校でも専門の教師が少ないという不安がある中、各学校が図工主任を中心にとままり工夫を進めてきた。



教育研究集会での討議



作品搬入 PTAも応援



家族で作品を見つけた喜び

このような教師の努力の成果が実を結び、本年度は無事42回展を迎えることができる。平成15年に開催された40回展では記念展として従来あった中学校を中心としたブロック制による展示をやめ、より学校独自の工夫を生かせるエリア制を導入し、組織運営などの改革も積極的に進めている。

また、岡崎市は平成18年に隣接する額田町との合併が決まっている。これを機会に新しい造形おかざきっ子展への機運も高まっている。

「わたしたちは、子どもたちにたくましい行動力と、みずみずしい感性を期待する。教師自らがまず創造し行動しないならば、どうして子どもたちへの教育に取り組みようか」。これは42年前に産声をあげた第1回展の実施計画書の巻頭言である。造形おかざきっ子展が積み重ねてきた造形活動への取り組みは、子どもたちの持つ無限の可能性への賛美と美術教師の造形教育にかける情熱の証であると言える。

今こうしている中でも、教室から新しい創造の芽が芽吹いている。私たちはこの芽を大切に見守り育てていきたい。

(おおた みきお)

身近な環境を光で演出

～みんなで作ろう 光の世界～

長崎県諫早市立真城中学校 山下 耕平

1. はじめに

晴れた日の昼、海を眺めていると波に陽光がきらめいていました。夜空を眺めると無数の星たちが大小さまざまな輝きを見せ、街の明かりも負けずにきらきらと輝いていました。美しく、心を癒してくれる自然や人工の光が私たちの身のまわりにはたくさんあります。

特に現代の生活に人工の光は欠かせないものになっています。ものを明るく見せたり、ものの形をクリアに照らす働きで欠かせないのももちろんですが、心を癒し落ち着かせたり、人の目を引きつける照明など雰囲気を盛り上げるような演出の働きも多く見られます。

本校前を通る国道444号線沿いの各民家でも、クリスマスの時期にはイルミネーションを飾ることで雰囲気を盛り上げることが盛んになっていました。そんな地域の方々とは話す中で、地域のPRになるような巨大なイルミネーションを制作しようと考えてみました。5×10mのパネル3枚を使用した「光の絵画」を共同制作するのです。パネルやロープライトの材料準備や作成、設置作業などは地域の方々にも協力していただきます。生徒だけでなく保護者、地域の人々を巻き込んで「光の絵画」を共同制作し、作品を広く発信することで地域をPRしたい!!

そこで本題材を「みんなで作ろう 光の世界」ということにしました。

2. 材料について

材料は約250m分のロープライトを使用しました。パネルは園芸用のネットを鉄パイプで組んだ外枠に張ります。その他使用する材料はロープライトをパネルに結ぶ紐ですが、これも園芸用のクイックタイ(ビニタイ)を使用しました。足りない

分のロープライトは買い足しましたが、基本的には大村市が以前購入していたものをお借りしたり、地域の家庭に使用しないまま残っていた材料を利用したりして制作しました。実際、これだけの材料をすべて購入するとなるとかなりの金額になります。しかし耐久性はあり、継続して使用していけば元は取れると考えますが、どうでしょうか？

3. 授業の展開

「しあわせ街道(国道444号線)」から連想できるものを出し合い、ひとつのウェビングマップにまとめました。その後、材料等の制作条件も考えながら話し合いを行い、テーマやデザインを決定していきました。昨年度は「星座～星を見よう、美しい夜空を見よう～」、本年度は「天使の詩～すべての人にしあわせな知らせがありますように～」というテーマで制作を行いました。テーマ決定後、各自デザインを考えます。生徒が考えたアイデアスケッチをもとに選考会を行い、デザインを決定します。

パネル制作は地域の方をゲストティーチャーに招き、指導を受けながら一緒に制作しました。制作場所を運動場にしましたが、これはパネルのサ



制作風景



パネルにライトを結び付けていく

イズが大きいこと、下図を直接書いたり消したりしやすいこと等のメリットがあるからです。

下図ができると、あとは協力してパネルにロープライトを結びつけていきます。完成をイメージしながら生徒同士、地域の人たちと協力して楽しくできる作業だと思います。

完成作品をフェンスに設置する作業は休日に地域の方をお願いしましたが、生徒たちも楽しみにしていたのか、休日返上で設置作業を手伝っていました。

4. 生徒の反応

生徒、保護者、地域の方々が集まり、カウントダウンとともにイルミネーションを点灯する点灯の様子は、国道444号線沿い民家のイルミネーションの点灯と合わせて、「しあわせイルミネーション」として、地域の情報紙や新聞、ケーブルテレビ等に紹介されました。自分たちが協力して作った作品を地域に広く発信し、そのリアクションの大きさに喜び、自信を深めるなど、大変有意義な造形活動を経験できたと思います。小規模校である本校の生徒にとって、生徒同士や保護者や地域の方々など、いろいろな人との多くの交流が、共同制作や展示を通してできたことはよい経験でした。作品をつくることで人を喜ばせ、自信を持つことができ、素直な気持ちできれいなものをきれいと言える…。こんな経験の積み重ねが美術を愛好する心情を育てたり、人間としての成長につながったりするのだらうと思いました。



イルミネーションの展示風景

5. おわりに

昨年、今年と2年続けて制作を行った結果、中学校美術科授業の枠を超えて、この実践は地域の行事として認知されてきています。昨年と今年、12月初旬から1月初旬まで、夜間に点灯をしていましたので、お正月に帰省される方々が楽しみにしているという話も聞きました。今後、地域のイベントとしてさらに定着していけばいいなと思っています。

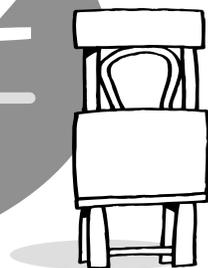
しかし、美術の授業の中で制作を行った上での感想ですが、授業時数を確保するのが困難な状況の中で、10時間近くを使うのももったいない気がしています。例えば総合的な学習の時間を活用できないだろうか…？ 選択教科で取り組んではどうだろうか…？ これから検討していかなければならない課題だと考えています。

(やました こうへい)

子どもの椅子

FROM

神奈川県横浜市立富岡東中学校
清水 和子



教師がおもしろいと感じている授業は、生徒も同じように感じてくれるのではないかと、手探りで新鮮な魅力ある教材を求めていました。コンピュータのように、時代の先端にあるようなものではなく、できるだけ自然に近く、手ごたえのある教材を探していました。

9年前に横浜市の市立小学校

の研究会として開かれている造形美術ワークショップに夏休みの研修として参加しました。その時出会った教材「彫り進み木版画」に魅せられました。創作木版画は、版木に彫刻刀で彫る彫り跡や木目の独特な味わいが魅力であり、また色面が比較的単純で明快な美しさもあります。以前から自分自身の作品制作で

木版画は制作していましたが、1回50分の授業時間の中では刷り紙を湿らせる時間と刷りの時間とをタイミングよく取る事が難しいのです。同じ理由で、ドライポイントの版画制作も週1回1時間の授業になってから困難になってしまいました。

しかし「彫り進み木版画」は、刷り紙(鳥の子紙)を湿す事なくそのまま使い、絵の具を伸ばすスポンジローラーも軟らかで絵の具をよく吸い、版に色がピツタリと乗ります。絵の具も水性で伸びがよくさらに毎回の後始末でも洗い流しが簡単でした。

ワークショップで紹介された小学生の作品は、軽やかな彫りで複雑な色の美しさを刷り出す

技術の高さを感じました。

絵の具を伸ばす時、バットのの上に数色を並べローラーで美しいグラデーションになるよう絵の具を引き伸ばす技法は、今まで考えた事ありませんでした。この技法には直接描くことでは得られない表現の可能性を感じました。まるで神の力が入り込んだように木版画独特の表現が現れるのです。そしてこのような魅力的な生き生きとした作品を中学生たちから引き出したいとの思いが募りました。

試行錯誤を経て、今は2学年での授業教材として定着しました。校内文化祭作品展で毎年この版画作品を展示します。作品の前で「きれいな色ね! どうや

ったのかしら?」「彫りも細かいし良かった何版使うのかな?」「すごい力作だね」と言う声を多く耳にしました。見に来ている生徒たちもその感想を聞いてうれしそうにしていました。

授業の進め方は、説明よりも百聞は一見に如かずで、まず彫りと刷りのデモンストレーションを見せます。「寄ってらっしゃい見てらっしゃい」とバナナの叩き売りの如くに威勢よく、バットの上の絵の具の伸ばし方や版木にローラーで色を乗せ紙に刷る手順の流れやコツなど生徒を集め、手元を見せながら技法を伝えます。バレンで擦った後、刷り上がった作品を見て「えー、色がきれい」、「すごいはっきり

写った」、「わかったから早くやりたい」と声を上げます。

制作記録と自己評価や完成作品の感想など記入するワークシートを活用していますが、「彫るとどうなるのか不安だった」、「最後に刷る色を二色にしてみました」、「色のかすれが気になったけどよい効果になっていた」、「自分でうまく版画ができてうれしい」など生徒も不安があれば向き合って考えたり、表現の意欲や創造の喜びに共感し作品を通して対話を深めたりしている様でした。私の教材としてこれからも研究を続けようと思います。

(しみず かずこ)

図工室

美術室

かつて、わたしが美大受験のために毎日石膏デッサンをしていた頃のことである。あるとき壁にぶつかり、どうしても思うように絵が上達せず悩んだことがあった。一時はもう絵の道に進むのをあきらめようかとも思った。しかし、周りからの励ましもあり、何とか気を取り直して再度描き続けていく決意をした。とは言え、相変わらずいくら描いてもほとんど埒が明かない状態であった。具体的には「納得のいく空間が出せない」のだ。同じ道を志す友人からは「石膏をよく見るしかないと思うよ。とにかくよく見ることだ」と言われる。それでもう、ただひたすら自分なりによく見ているつもりになって描き続けた。

「わたしの思い出」

真下 清志(群馬県安中市立第二中学校)

そして日は経ち、ついにはあと数日後には入試本番というところまで押し迫ったある日のこと(初めて石膏を描き始めてから果たして何枚目になるのだろうか…)。それはふとした瞬間に突然感じられたのだ。3D画面の立体が浮かびあがるように、自分の目の前にある木炭紙に求めた空間性が見えてきたのである。まさに目から鱗が落ちる気持ちであった。しかし同時に、今まで自分なりに石膏を見ていた見方とは明らかに違う見方(感じ方、とらえ方)が存在する

ことに気づかされた。そして、自分なりに頑張ることはとても大切ではあるが、助言されたことを本当に理解するのはとても難しいのだなと思った。

さて、これまでの話は私の極めて個人的な経験談であるが、教育現場に立つ現在、果たして自分は子どもたちにどれだけ理解されやすい、適切な助言や指導をおこなっているだろうか。

(ましも きよし)

「今」

長雄 義明(秋田県湯沢市立雄勝中学校)

「先生になろうと思ったのはいつ頃ですか。どうして美術の先生になりたかったのですか」。

勤務先が変わっても子どもたちの「今」の中に共通点を見つけることができる。「未来」と向き合う気持ちにどう答えたらいいか。それを考えるきっかけを与えてくれた番組があった。

「プロフェッショナル・仕事の流儀」はNHKの新番組だった。プロダクトデザイナーの深澤直人氏の仕事を取り上げられていて、氏の職業観や人生観を強く感じた。片言の英語力で米

国のデザイン事務所に飛び込んだこと。休日に自分で建てた山小屋を訪れ草刈りをしながら自分と向き合う時間をつくっていること。名前の書かれた雑巾でオフィスを掃除することから毎日が始まること。自分の「今」の原点を見失わず、毎日を送っていくことが個性的に生きることだと感じた。

「きれいで気持ちのいい所ですが、気持ちのいいものは生まれません」、「跳べないハードルを跳びます」という言葉が胸を突いた。一つひとつの過程が目的

を達成するためのプロセスであり、日々、全く異なることと思えることも、自分の「未来」に関係する行動であり、自分の「信念」を貫くことにも重なる、ということを改めて思い知らされたような気がした。

そして「仕事」という言葉を「今」という言葉に置き換えたとき、生徒の聞きたい答えになると思えた。

「美術の先生としての今を選んだ理由は何ですか」。

生徒と時間を共有し、個性的な表現方法を探れる魅力があること。自分の心の中心部分を語りながら考え続けていきたい。「今」、私は、そんな自分と向き合っている。

(ながお よしあき)

木の枝をひろって筆をつくらう

～身近な素材からの短時間題材開発～

千葉県山武郡横芝町立大総小学校 南 隆一

1. はじめに

学校や地域の特性を生かした題材の開発がいろいろと工夫・実践される中で、造形遊び的に身近な暮らしの道具などに目を向けると、楽しい表現に出会うことがある。今回は身近な素材の木の枝で何かできないだろうか考えた。

よく自然の中に樹木を観察していると、木の根っこや枝の形、また小枝や木の葉などの形や色に興味をひかれることが多い。そのきれいな形や不思議な形などに、味わいを感じるのだ。目の前の形を気に止めることがなければ通り過ぎてしまう暮らしの中の自然との出会いである。

もちろん、私も初めから木の枝を使った筆づくりの発想ではなかった。偶然のアイデア作品のひとつである。

筆、鉛筆など筆記用具のほとんどはまっすぐなもので、変に曲がっていると普通は扱いにくい。しかし、以前にどこかで曲がった鉛筆づくりを見たことがある。くすの木など芯が抜きやすい木の枝でちょっと工夫、おもしろい。造形作品として、普通ならばこのような形にはならない、と思う決まりのような常識が誰にでもあるものだから、その鉛筆を持った感触は不思議なものだった。

そんな体験もあったが、今回の筆づくりのきっかけはPTAの奉仕作業のときのこと。日も暮れかけて作業の後始末のとき、グラウンドで何気なく拾った1本の小枝でリアカーの中の残りのゴミをはたいていた。そのまま焼却しているはずの小枝を持ちながら放課後の図工室に入った際、手洗いと一緒にその小枝も洗ってしまった。そのとき、子どもたちが使えなくなった筆の穂先だけ置いてあるのが目に入った。そこでこの筆の頭と枝をくっつけてみようか、と変な筆を思いついた。図工室のナイフで必要のない部分を削ったり紙ヤスリ

をかけたたりして、完成した筆の不思議な魅力、今でもそのときの様子をよく覚えている。あれから十数年あっちこち持ち歩いたが、紛失することなく今でも時々愛用品として使っている。筆入れに入らない不便さがまた別の味わいになる、個性の強い目立つ奴であります。

人もみんなそれぞれ性格や個性の違いがあるのと同じ、そんなことを感じながら時々個性の話をするときなどにこの筆が登場することがある。筆先の他に、ちょっとゴムのハンコをつけてみると、またその使いにくさが別の味わいになる。小枝などの部分をもっと細かく切ってハンコの軸にするのもおもしろく、他に発想も広がると思う。こんな筆を使っていると逆に普通の筆が使いにくいように見えてくるのも不思議なものだ。どこか壁に飾ってみたり、置き物のようにしてインテリアにもなる。短時間題材のひとつだが、生活の中の美術として時々思い出したように制作の場を設けている。

今年度は6年生の修学旅行を引率することになっていたので、杉並木や雑木林の散策途中で何か拾って帰ろうかと声をかけて、1人1本のオリジナル筆をつくった。子どもたちは、でき上がりを手に持って不思議そうに眺めていた。何かの折に実際に使ってみてほしい。今までに図工クラブや学級で何回か扱ってみたが、地域性と本人の興味から生まれた不思議な形である。

筆の良し悪しは素材探しで全てが決まる。どんな枝でもよさそうに見えるが、大方は丈夫なものに限る。竹の根っこなどもおもしろい。私は海の流木などが好きでよく拾ったりしたものだが、海で拾える枝は塩で丈夫になっている。

筆先は不要になった筆の頭部を使うのがよいが、筆の太さや形などによっては筆先だけを購入できると、扱いやすい。1本の枝や根っこから限りな

く発想は広がる。どの地域でも気軽に実践できる、暮らしに生きる造形活動である。同じ題材・素材でも扱う人の感性の違いでいろいろと違った作品が完成するだろうが、木の枝など自然物からの造形活動はいいものだ。

2. 制作の手順

①導入

何本か事前に参考になる作品をつくったり、イメージを伝える完成品・写真・イラストなど工夫をして導入時に発想をひろげるようにする。

②身近に散策などができる場所があるかどうか、場所探し、素材探しをしておく。地域によってはすぐ近くにもあるが、ない場合は教師側で流木などを事前にたくさん用意しておくのもよい。教材ボックスとして大きな箱を図工室に用意して置いておくと、日常の教材研究、新しい題材に活用できる。

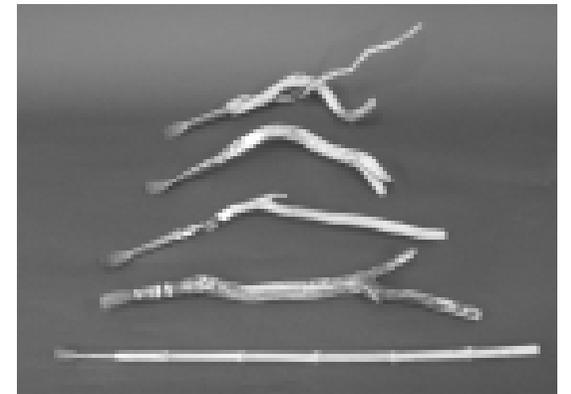
※以上①や②については、授業以外の場で扱う個人的な課題としてもよい。

③筆先と軸(木の枝)の部分の接合の方法を考えながら筆になる全体のイメージをまとめる。完成品のイメージは、拾った素材の形で決まってくる。

※海や川の流木、また火山ガスが出る温泉地の樹木の根っこなど、真っ白なものや曲がりのおもしろい形がたくさんある。私は箱根の大涌谷などで硫黄で洗われたきれいな根っこを見たことがある。地域によって質や形の違った作品ができる。

④軸の部分と筆先部分の取りつけ、接合部分の削りや接着、着色など個別に支援をしながら完成させる。

※子どもたちは刃物の使い方、接着方法など基本的なことを体験していないことが多いので、けがに注意しながら具体的に作業を手伝うほうがよい。



いろいろな形の筆

※用具(小刀、カッター、キリ、紙ヤスリ他)

小型ナイフやカッターなど刃物の使い方、削り方を知る。

※流木その他拾った枝などを、大きな箱(教材ボックス)に集めておく。

※それぞれ接合部分は、材質や曲がりにより工夫をすればほとんどの形が大丈夫だが、基本的には穂先か軸かどちらかに組み込むこと。

⑤完成品はよく全体を見て不要部分のカット、筆のポイント部分を着色、彫り刻むなど手を加えてみるのも楽しい。完成後最初に使うときは、不思議な感触がある。個人的な話だが、私はこのところ普通の筆を使うことが少ない。

3. おわりに

身の周りの自然物から題材開発のヒントはたくさんある。日頃から普通に表現に取り組む中で、ときに目や心の位置を少し変えてみると気がつかないものが見えてくる。表現に限らず私たちの暮らしのほとんどが、本当はそうでなくてもよい部分を含んでいる。今私は、小さいゴム印の軸、あれこれ拾い集めたゴミのような小枝や竹の切れはしを使って6年生に卒業記念のハンコを彫っている。

(みなみ りゅういち)

「マイアートTシャツ」

～ 子どもから始まる造形活動への教師の仕掛け～

東京学芸大学附属竹早中学校 栗田 勉

1. 人と人をつなぐ ビジュアルコミュニケーション

自分を伝え、他の人からの発信を受け止める。人とつながりの中で、言葉以上にその人となり、心に届く手段として、ビジュアルの力はとても有効である。美術の時間を通して育てたい力とは、そんな視覚を通じてのイメージの交流の能力だと思う。美術館では作品を通じて、作者の人間性や心の動きといったものに共感し、観る人を立ち止まらせている。そこには描写力や、造形能力の優劣は存在しない。飾りの無い素直な自己表現こそが、観る人の心を揺さぶっている。世代、人種、国籍や言葉の壁を超えたビジュアルコミュニケーションは、これからの国際社会において、もっと重要視されていってもよい、国際交流の手段という側面もある。

教育現場だからといって、作品の優劣や造形能力を高めることを目的とする内容より、生徒一人ひとりの伝えたい思いが自分らしい造形的な表現スタイルと結びついてこそ、本当のアートとしての豊かさが実感できるのではないだろうか。

2. 「マイアートTシャツ」

これは、上記のような本校美術科の考えの中で、教育実習の大学生が題材を発案、実践した「マイロゴデザイン」をもとに実施年度を変えて発展させたものである。生徒がイニシャルという条件設定の中で自分自身を視覚化し、着るものを介してそれとなく相手に発信する、という作品づくりを通して、デザインを学習し、さらにアートを生活の中に活かす楽しさを味わってもらおうという内容でもある。

(1) 初年度の展開(2学年) 6時間

① 生徒が自分のイニシャルという制限の中で、文字の特徴やおもしろさを発見する。

- ② 自分の嗜好や人柄など、自分らしさを造形的に文字と絡めて表現する。
 - ③ 作品例や資料をもとに、形のよさや美しさを追求する。
 - ④ アクリルカラーや、身近なマーカーで仕上げる。
- (2) 次年度の展開(3学年) 6時間
- ① 1年前の作品と再会し、その時の自分自身と活動を振り返る。
 - ② CGでそれを再現することを試みるなかで、ソフトやツールの使い方を学習する。
 - ③ コンピュータならではの使い勝手のよさを体験しながら、新たな発想を盛り込み、新しいマイロゴデザインを作成していく。そのなかで、画面全体に及ぶアート作品に発展したり、イニシャルが可読性を失っていても、それを本人の作品のテイストとしてそのまま追求させる。
 - ④ Tシャツプリントとして使用することが前提だが、着ることを意識させすぎないように留意する。

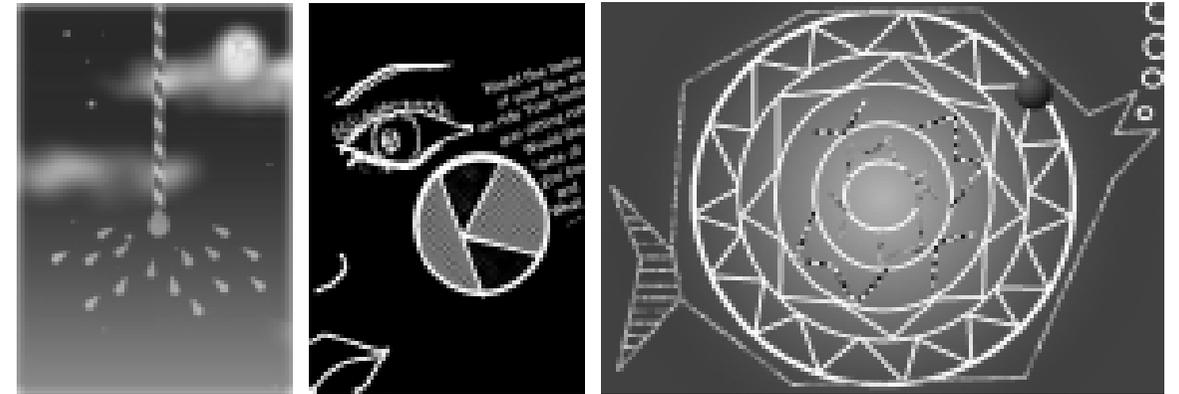
(3) アイロンプリント時の授業内容

① 主な活動

生徒が持参した無地のTシャツに、アイロン転写用にプリントアウトされた作品を転写する。さらに発表会のために、プリントデザインに調和したプライスタグ風の名札も作成する。

	教 師	生 徒
道 具	アイロンやマット等 転写用道具一式 はさみ、カッター	
材 料	転写用プリント タグ用紙、タコひも 安全ピン	無地のTシャツ つくりかけのタグ 簡単な描画材料

使用する主な道具・材料



生徒のデザイン例(CGにて)

(4) 評価

- ・自分のイニシャルの形をきっかけに文字の形のおもしろさや、形の特徴を感じ取り造形活動の発想や構想に生かしているか。
- ・CGの有利性を生かし、造形美につなげようとしているか。
- ・Tシャツプリントのデザインに興味を持ち、でき上がりに達成感を感じているか。
- ・Tシャツのタグづくりに意欲的に取り組み、調和したデザインを目指したか。

3. おわりに

デザインの学習が、肝心の「使う」場面がないまま終了してしまうことが、これまでの自分の授業で多くあった反省から、できるだけ役に立つ「ホ

ンモノ感」を得られる内容を心がけている。デザイン活動の本質がそこにあると思うからである。

自分らしさを伝えたい、という子どもらしい素直な願いがこの題材の出発点である。しかし、ただ生徒たちの自由に任せきりの活動になってしまったら、教師の関わりが希薄になってしまい、表現を深めることができなくなってしまうと思う。場面場面でいかに生徒に揺さぶりをかけ、「仕掛け」を用意するかが授業としての醍醐味である。渡された転写プリントを生徒が自分のアイロンがけによって、白いシャツに写した瞬間、本人と周りからも「おおっ」と、声があがる。そんな「心躍る」場面を仕組んでいきたいと思っている。

(くりた つとむ)

造形プラザ

夏の研究会のご案内

○第29回 児童造形教育研究集会

「なぜ、学校で造形活動をするの？」

- 日 時：平成17年 8月 8日(月)
- 会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター(東京・小田急線 参宮橋駅より徒歩7分)
- 主 催：児童造形教育研究会
- 内 容：全体会
講演「ゲーム脳の恐怖」(仮称) 講師：医学博士 森昭雄先生
実技研修・ざっくばらん討論
- 問合せ：〒111-0051 東京都台東区蔵前3-20-2 クレパスビル内
児童造形教育研究会事務局
tel・03(3862)3937 fax・03(3862)3905

「ふぐは食いたし金はなし」

カボチャドキヤ国立美術館館長 トーナス・カボチャラダムス

とたんに、種村季弘先生のお姿が消えたのである。生前から徘徊癖のある方ではあったが、なにしろこの世の人でないから、始末がわるい。

死んだ人がいなくなったと言って、だれが相手にしてくれるだろう。あたり前の話ではないか！

ため息ついて、吾輩は、あてもなく波止場に向かって歩き始めたのである。

ふうと汽笛がなって、「温泉連絡船」が合図をしている。

おっと、合点。吾輩は、係員にどなられながら、改札口を駆け抜け、3メートルほどジャンプして、連絡船に飛び乗ったのである。混み合った階段を駆けのぼり、裸になって、温泉にとび込むと、やっぱり。

「先生、ひどいじゃありませんか。」

「ああ、いい湯だにゃあ。」

「天下一、びっくり温泉の湯ですからね。」

「ああ、いい眺めだにゃあ。こんな仕掛けは、地獄にもないにゃあ。」

おおきな夕陽が、関門海峡のむこうの、下関のそのまたむこうの日本海に、ゆらゆら沈む。湯舟のなかで、じいちゃんもばあちゃんも、とうちゃんもかあちゃんも、にいちゃんもねえちゃんも、坊ちゃんも嬢ちゃんも、金色に染まって、微笑んでいる。



「キムチ町のちまち」

「極楽、極楽。」

地獄から来られた種村先生も、ご満悦である。

どんぶらこ、どんぶらこ、「温泉連絡船」は関門海峡を渡って、体が心からあたたまったころ、唐戸についた。

「さあて、フグでも食って、当たって死んだら地獄に帰るか。日清戦争の講和条約の談判で有名な春帆楼はどうだい。」

「先生、いやに景気がいいですね。」

「金なら僕にまかせにゃさい。」

生前は、むろん貧乏にはお見受けしなかったが、まっとうな文筆稼業。雑誌の取材でもなければ、1人5万円のフグ料理を召し上がる方には見えなかったのである。

さては先生、警察当局の目の届かない地獄に行かれて、生前蓄蓄を極められた錬金術を、実地に応用されているのではあるまいか。

しかし、春帆楼5万円と聞いて、さすがの先生も呆れはて、唐戸の町中のフグ料理店を巡ってみると、3万円、2万円、1万円。いちばん安いので6千8百円か！

「高い高い。賽銭貯めて、食える代物じゃにゃいね。」

下関駅近くのキムチ町市場は、朝鮮の人びとの市場である。下関には、朝鮮の人が多いのである。

「釜山のチャガルチ市場みたいだにゃ。生きてる時には、下関から連絡船に乗って、よく行ったものだよ。」

魚や野菜や果物や肉や乾物が、ひとつ鍋の中で、煮えたぎっているような町である。

屋台で、ビビンパブとカルビタンを食べた。どんぶりでマッコリを飲んだ。

おなかいっぱいになったら、こころが天国になった。裸電球がお星様みたいに輝いて、天使が2人、歌い踊っている。

(つづく)

下関子どもの絵を考える会のあゆみ

山口県下関市立王江小学校 岡村 明子

下関子どもの絵を考える会「ざっくばらん」事務局

そこで先生方の持っておられる問題や貴重な体験をお聞かせ願ひ、今後の研究や話し合いの指針したいと思います。

…というお誘い文を発起人5名の先輩の先生方が各学校の図工主任に呼びかけられて、この会が始まりました。以後、毎年テーマを掲げ、実践や子どもの作品を通して、取り組みや指導などを熱く語ったり、市立美術館で鑑賞したりして、研修を続け今日に至っています。

年度末には、研究実践、美術教育に対する考えや提案、入会して思うことや希望すること、美術展を訪ねて、雑感、随筆、芸術図書の紹介等を綴って、会誌「ざっくばらん」を発行してきました。



これまでの冊子のバックナンバー

振り返れば28年間、有志数人で始まった会が、今日まで継続してきた原動力は何でしょうか。

子どもは、本来絵を描くことが好きです。描くことに熱中し、描くことによって自分を主張しています。子どもの興味・驚き・喜び…1枚の絵は、子どもの心を物語っています。

子どもの絵は、子どもの姿です。あるときは、ゆったりと、あるときは、鋭いタッチ。色も形も、筆の運びも、すべて子どもの主張です。

私たちはその主張を聞きもたしてはなりません。私たちは、もっと子どもの絵を知りたい、もっと子どもの心とかかわりたい、そんな願いを持って集まっています。 (おかむら あきこ)

図画工作科は、絵を描いたり、ものをつくったりする造形活動で、自己表現を大切にする教科です。見て感じる力を培い、造形的な発想や構想の能力・感性などを養い、心豊かに表現する力を育てていくことが課せられています。

昭和51年6月25日に、

終戦後、子どもの絵は、すばらしい飛躍をしたといわれます。しかし、現在、子どもの絵はつまらなくなったといわれます。自由さがなくなったともいわれます。典型的になったともいわれます。

一方、指導者の立場に立ったとき、子どもの絵の中で伸ばすものは何か、指導すべきものは何か、相変わらず、混沌としています。このことは下関においても全く同様で、子どもの絵を見て悩み、指導で立ち往生してきました。私たちが持っている問題や悩みを単にそれで終わらせるのではなく、同志が集まり、たとえ歩みはわずかであっても少しずつ前進し、解決して、生き生きした子どもの絵が生まれるようにしていきたいと思い、「子どもの絵を考える会」を発足させることにしました。1名でも多くの方の参加をお待ちしています。毎月1回、第3土曜日、午後2時から会合を持つことにしています。

本年度は、まず、線で描く絵(特に人物)を中心に話を進めていきたいと思っています。線で描く絵は、幼児の時から始まり、子どもたちの身近な存在ですし、ある意味においては、絵画表現の基礎ともいえましょう。一方、指導の立場から考えると内容豊かな絵にするための一手だてかもしれません。しかしながら、現実を考えますと、子どもたちは、すごい抵抗を感じていますし、発達段階に即応した表現も見られません。対象を見る目、表現する力が備わっていないからでしょう。子どもたちは、どのような問題を持っているのか、どのような指導の手だてがあるのかを、考えていきたいと思っています。